

# 学校の中で養護教諭に求められる役割に関する研究

## — 一般教諭からみた養護教諭のあり方を中心に —

脇山 美希

Role is expected for Yogo-teacher on school.  
—Yogo-teacher should be from teacher's view—

Miki WAKIYAMA

In this study, I make clear that what is demanded for Yogo-teacher or what role is expected for Yogo-teacher on real education front. The stand point of how Yogo-teacher should be compare teacher's view and Yogo-teacher's view. Through this study, especially, I make clear Yogo-teacher figure of an elementary school.

The result of the investigation, the point of role and act and attitude is expected for Yogo-teacher is when disease or accident happened, whether "Yogo-teacher can give proper treatment" and the point of quality is "judgement".

The difference of recognition between teacher and Yogo-teacher is role of Yogo-teacher. Teacher think that most important of Yogo-teacher's role is "nursing's role". But on the other hand, Yogo-teacher think that most important is "educational role". Add, teacher ask Yogo-teacher for "nursing's license".

I hope that the result of this study contribute Yogo-teacher's cultivation.

本研究では、現在の教育現場において養護教諭に実際に求められている、あるいは期待されている役割は何か。さらに、養護教諭としてどうあるべきかを、「一般教諭からみた養護教諭のあり方」と、「養護教諭からみた養護教諭のあり方」のそれぞれの視点から比較検討し、特に小学校において求められる養護教諭像を明らかにすることを目的とした。

質問紙調査と面接調査の結果、養護教諭に求められている役割・行動・態度については、「疾病や事故時に適切な判断・処置をすること」が重要であり、資質については「判断力」が、一般教諭も養護教諭自身も養護教諭に必要なだと認識していることが明らかとなった。

一般教諭と養護教諭の認識の差が表れたのは、養護教諭の役割についてであった。一般教諭が養護教諭の役割の中で、一番大切だと考えていることは看護医療的役割であった。しかし一方、養護教諭は教育的役割が最も大切だと考えていた。加えて一般教諭は養護教諭に対して養護教諭に看護師の資格を求めていることも明らかとなった。

今回の調査の結果が養護教諭の育成に寄与できればと願う。

## 1. 問題

### 1-1. はじめに

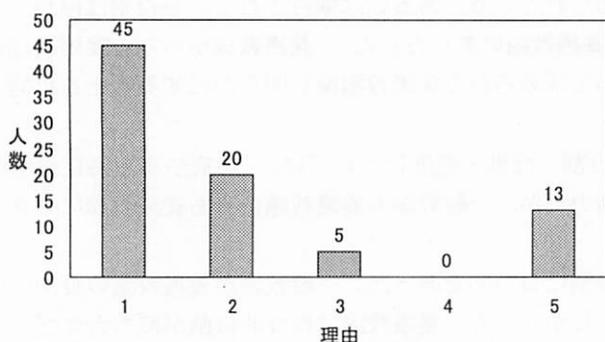
養護教諭という存在に対してどのようなイメージを抱くだろうか。おそらく、保健室で手当をしてくれる人、話を聞いてくれる先生など、人それぞれ今まで関わりを持ってきた養護教諭を思い出し、いろいろなイメージが湧くことだろう。実際の養護教諭は、毎日多くの児童・生徒が訪れる保健室において、休む間を惜しんで児童・生徒の身体的、精神的ケアにあたっている。そして、対人だけではなく学校内の環境や設備について

の衛生管理など、実に幅広い職務を担っている。<sup>1)~3)</sup>

大谷によれば『かつては養護教諭養成過程へ入学してくる学生の養護教諭に対するイメージは否定的傾向にあったが、今日では、「教師にはなりたくない」という気持ちを持ちながら養護教諭養成課程に入学する者も現れ、「自分がお世話になった養護教諭のようになりたい」など、養護教諭との直接的関わり体験を味わっている者たちが、養護教諭を目指して入学してくるようになった』という。<sup>4)</sup> 事実、筆者も養護教諭養成課程をもつ短期大学において、養護教諭養成課程に在学している1、2年生に「なぜ養護教諭になりたいと

思ったのか」という質問紙調査を実施したところ、およそ5割が「今までに出会った養護教諭に憧れて」と解答していた(図1)。このように、養護教諭を目指す学生が学校に入職し直面するのが一般教諭との関係であろう。実際、卒後研究などで短大卒業後養護教諭として勤めている卒業生が集うと、一般教諭との連携に悩んでいるという話を多く聞く。<sup>5)</sup>

1998年の教育職員免許法の改定時に、養護教諭は養護教諭として3年間在職していれば「授業」を担当する教諭を兼務することができるようになった。これについて大谷は、「現職の養護教諭の中には、この免許法の特例措置を歓迎する向きもあるようだ。一養護教諭という名称から「教諭」という名称に変えたいという声も聞こえてくる」と紹介した上で、ここには養護教諭の「授業を担当していない職種であることや、教諭とは異なる名称で自分たちが職場で被っている差別感が影響している」と推察し、「学校社会は、授業を担当する教諭が大半を占めており、そのような職種の意向が支配していることは否めない」と指摘している。<sup>6)</sup>このように、学校における差別構造が存在しているのもまた事実であろう。その中で、養護教諭としてどのように職務を全うしていくべきなのか、そして、一般教諭とよりよい連携や協力体制を整えていくためには、養護教諭に何が必要なのか又求められているのかを考える必要があるのではないだろうか。



理由1: 今までに出会った養護教諭に憧れて  
理由2: 子どもが好きだから  
理由3: 資格を取りたかったから  
理由4: 親が養護教諭だから  
理由5: その他

図1. 養護教諭養成課程在籍学生の養護教諭になりたいと思った理由(平成20年11月に実施)

### 1-2. 一般教諭と養護教諭との連携・協働の必要性

ここで、一般教諭と養護教諭との連携や協働の必要性について考えてみたい。

よく、教職員の連携や協働は重要だということは耳にするが、具体的にどのような部分で必要になってくるのであろうか。入澤は「学校の危機管理には教職員の連携が必要」であり、「事故の防止には、特に養護教

諭と担任との連携が必要である」とした上で、「(子どもたちや学校の)問題を発見できない理由の一つに教職員間の意思疎通の悪さ」を挙げている。さらに、「学校の安全対策には、学校組織の雰囲気や円滑にしておく必要がある」ことや、「教職員間の仲が悪ければ危機管理はできない」とし、「教職員間の仲が悪いと子どもたちまでもがギクシャクとしてしまう」と指摘している。<sup>7)</sup>もちろん、学校の安全対策や危機管理だけに教職員の連携・協働が必要というわけではなく、いろいろな部分で円滑な関係は求められているが、この部分だけをみても、学校という場がいかに関職員の連携や協働ということをベースに組織として成立しているかをうかがうことができる。

では、どのようにしたら一般教諭との連携や協働を円滑に行えるのであろうか。この部分を考えるにあたり、一般教諭から求められている養護教諭像を知ること、その解明の足がかりになればと考えた。

## 2. 目的

現在の教育現場において養護教諭に実際に求められている、あるいは期待されている役割は何か。さらに、養護教諭としてどうあるべきかを、「一般教諭」と「養護教諭」双方の視点から検討し、学校、特に幅広い年齢の子どもたちを教育する場であり、綿密な教職員間の連携・協働が必要であろう小学校において、求められる養護教諭像を明らかにする。

## 3. 先行調査

本調査に至るまでに実施した質問紙調査の、目的と方法を表1に示す。

## 4. 本調査

### 4-1. 目的

先行調査で得られた結果を基に、小学校の中で養護教諭に求められる役割について考察し、教育現場から求められる養護教諭像を明らかにすることを目的とした。

### 4-2. 方法

平成20年11月に、関東圏内及び静岡県内の小学校に勤務している一般教諭および養護教諭に対し質問紙調査を実施した。

一般教諭及び養護教諭に対しては郵送で質問紙を送付し、同封の返信用封筒にて返送していただいた。また、一部小学校関係者へ質問紙の配布を依頼した。なお、質問紙の配布数は一般教諭185部、養護教諭127部であった。

表 1. 先行調査について

予備調査	<p>目的: 実際に現場で働く一般教諭および養護教諭が、それぞれどのように養護教諭を捉えているのかを把握し、質問項目を作成することを目的として実施した。</p> <p>方法: 平成 20 年 3 月に一般教諭 3 名と養護教諭 9 名へ「養護教諭のあり方」についての質問紙調査を実施した。調査用紙は各個人へ郵送で配布し、回収も郵送で行った。質問内容は自由記述での回答を求めた。</p>
調査 1	<p>目的: 先行研究<sup>8)~12)</sup> および、予備調査 1 で得られた回答をもとに質問項目を作成し、一般教諭からみた養護教諭のあり方について、双方の教諭の意見が反映される質問内容になっているかの確認を行い、質問項目の精査を行うことを目的として実施した。</p> <p>方法: 平成 20 年 7 月に、神奈川県内の小学校 1 校と東京都内の小学校 2 校の一般教諭 45 名および養護教諭 3 名に対し質問紙調査を実施した。神奈川県内の小学校への配布は、当該小学校の教諭に依頼した。また東京都内の 2 校についても、当該小学校関係者へ質問紙の配布を依頼した。回収方法は、各教諭・養護教諭が回答したものをプライバシー保護の観点から、一度封筒に入れてもらい、それを学校ごとに用意した回収用の封筒に入れてもらい、学校ごとに配送で回収を行った。</p>

#### 4-3. 結果

一般教諭 73 名、養護教諭 90 名から回答が得られ、回収率は一般教諭 39.46%、養護教諭 70.87%であった。回答者のうち、一般教諭は男性 21 名、女性 52 名であり、養護教諭は全員が女性であった。また、非常勤の人数は一般教諭 2 名、養護教諭 3 名であった。勤務年数については、最短が一般教諭・養護教諭共に 1 年、最長は一般教諭 35 年、養護教諭 36 年であり、平均勤務年数は一般教諭 18 年、養護教諭 17 年であった。さらに、養護教諭のうち看護師資格所持者は 11 名であった。また、一般教諭の勤務先の内、養護教諭が複数配置（2 名配

置）体制なのは 21 名、養護教諭の内複数配置（2 名配置）体制なのは 11 名であった。養護教諭、一般教諭の各問に対する結果は以下の通りである。

##### 4-3-1. 因子分析

養護教諭、一般教諭に対して実施した質問紙調査の各問について、それぞれの養護教諭に対する認識の仕方や求める役割などについての傾向を見出すと共に、下位尺度得点を用いて一般教諭と養護教諭の比較を行うことを目的として、因子分析を行った。なお、全質問の内 9 の質問について実施したが、ここでは、「養護教諭に求められる役割・行動・態度」、「養護教諭に求められる資質」、「実際に連携が困難な時」についてのそれぞれの結果を示す。

##### ①養護教諭の因子分析結果

因子分析の結果、養護教諭への各質問から抽出された因子を表 2 に示す。

表 2. 養護教諭の因子分析結果一覧

(1) 養護教諭に期待されている役割・行動・態度について	
抽出された因子	I. 視点と観察力 ( $\alpha = .80$ )
	II. 児童への対応力と関係の構築 ( $\alpha = .79$ )
	III. 養護教諭独自の実践力 ( $\alpha = .82$ )
(2) 養護教諭に求められる資質について	
抽出された因子	I. 積極性 ( $\alpha = .86$ )
	II. 協調性と判断力 ( $\alpha = .82$ )
	III. 自分自身の管理 ( $\alpha = .77$ )
	IV. 人間性と資格 ( $\alpha = .62$ )
(3) 一般教諭との連携で困難を感じる時について	
抽出された因子	I. 一般教諭とのコミュニケーションが必要な時 ( $\alpha = .84$ )
	II. 専門知識の共有が必要な時 ( $\alpha = .79$ )

初めに、養護教諭に期待されている役割・行動・態度について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。

第 I 因子は「9. 臨機応変な対応力」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、養護教諭が持つべき視点や観察力と考えられたため、「視点と観察力」と命名した。第 II 因子は、「13. 児童の気持ちを引き出せる」などの項目に高い負荷が得られた。この因子は、養護教諭が対児童に対して築くべき関係性や対応力と考えられたため、「児童への対応力と関係の構築」と命名した。第 III 因子は、「7. 来室しやすい保健室の環境作り」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、養護教諭ならではの実践力と考えられたため、「養護教

論独自の実践力」と命名した。

さらに、内的整合性を検討するため各下位尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、因子Iでは $\alpha=.80$ 、因子IIでは $\alpha=.79$ 、因子IIIでは $\alpha=.82$ という値を示した。このことから、内的整合性があることが確認できた。また、各因子の下位尺度得点の算出を行った。

さらに、質問項目の性格上、各項目の平均点が高得点に偏ることを考慮し、20項目の中でも特に期待されるもの3位までを順に選択してもらった。1位から3位までに選ばれた項目の総数を出し、1位には $\times 3$ 、2位には $\times 2$ 、3位には $\times 1$ とし得点の算出を行った。その結果、総合得点1位は「20. 疾病や事故時に適切な判断・処置をする」で211点、2位「4. 児童の異常を見逃さない観察力がある」で61点、3位「16. 医療・看護の知識がある」で51点であった。

次に、養護教諭に求められる資質について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。

第I因子は「20. 交渉力」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、養護教諭が自ら実践したり働きかけたり学んだりすることと考えられたため、「積極性」と命名した。第II因子は、「11. 協調性」などの項目に高い負荷が得られた。この因子は、判断力とコミュニケーション能力や明るさなどの協調性に関わる部分と考えられたため、「協調性と判断力」と命名した。第III因子は、「7. 忍耐力」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、養護教諭として任務を全うするための構えと考えられたため、「自分自身の管理」と命名した。第IV因子は、「2. 看護師の資格」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、優しさや豊かな人間性など養護教諭の人柄と資格についてふれられている部分だと考えられたため、「人間性と資格」と命名した。

さらに、内的整合性を検討するため各下位尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、因子Iでは $\alpha=.86$ 、因子IIでは $\alpha=.82$ 、因子IIIでは $\alpha=.77$ 、因子IVでは $\alpha=.62$ という値を示した。このことから、内的整合性があることが確認できた。また、各因子の下位尺度得点の算出をおこなった。

さらに、質問項目の性格上、各項目の平均点が高得点に偏ることを考慮し、20項目の中でも特に期待されるもの3位までを順に選択してもらった。1位から3位までに選ばれた項目の総数を出し、1位には $\times 3$ 、2位には $\times 2$ 、3位には $\times 1$ とし得点の算出を行った。その結果、総合得点1位は「17. 判断力」で135点、2位「1. 豊かな人間性」で74点、3位「4. コミュニケーション能力」で55点であった。

次に、実際に一般教諭との連携で困難を感じる時に

ついて、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。第I因子は「6. 養護教諭からの依頼を行動に移してくれないことがある時」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、日常の中で養護教諭と一般教諭との協力体制や連絡体制が必要な時と考えられたため、「一般教諭とのコミュニケーションが必要な時」と命名した。第II因子は、「3. 健診等の専門知識を理解してもらう時」などの項目に高い負荷が得られた。この因子は、養護教諭が行う専門的な仕事についての一般教諭との意思の疎通が必要な時と考えられたため、「専門知識の共有が必要な時」と命名した。

さらに、内的整合性を検討するため各下位尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、因子Iでは $\alpha=.84$ 、因子IIでは $\alpha=.79$ 、という値を示した。このことから、内的整合性があることが確認できた。また、各因子の下位尺度得点の算出をおこなった。

## ②一般教諭の因子分析結果

次に、因子分析の結果、一般教諭への各質問から抽出された因子を表3に示す。

表3. 一般教諭の因子分析結果一覧

(1) 養護教諭に期待している役割・行動・態度について	
抽出された因子	I. 児童への適切な対応 ( $\alpha=.88$ )
	II. 自己啓発 ( $\alpha=.77$ )
	III. 知識 ( $\alpha=.73$ )
	IV. 的確な判断と連携 ( $\alpha=.56$ )
(2) 養護教諭に求める資質について	
抽出された因子	I. 基本的資質 ( $\alpha=.88$ )
	II. コミュニケーション的資質 ( $\alpha=.85$ )
	III. 行動性 ( $\alpha=.84$ )
	IV. 教養 ( $\alpha=.78$ )
(3) 養護教諭との連携で困難を感じる時について	
抽出された因子	I. 養護教諭とのコミュニケーションが必要な時 ( $\alpha=.92$ )
	II. 専門知識の共有が必要な時 ( $\alpha=.86$ )

まず、一般教諭が養護教諭に期待している役割・行動・態度について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果4因子構造となり、18項目が残った。

第I因子は「13. 児童の気持ちを引き出せる」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、児童への対応や関わりについて期待している部分と考えられたため、「児童への適切な対応」と命名した。第II因子は、「2. 健康管理ができる」などの項目に高い負荷が得られた。この因子は、養護教諭が日々自分自身を見つめ

直し、向上させていくということへの期待と考えられたため、「自己啓発」と命名した。第Ⅲ因子は、「16. 医療・看護の知識がある」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、養護教諭としての職務を全うするために必要な知識の獲得と醸成への期待と考えられたため、「知識」と命名した。第Ⅳ因子は、「20. 疾病や事故時に適切な判断・処置をする」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、養護教諭が行うべき適切な判断と、判断したことを円滑に実施するための関係諸機関との連携への期待と考えられたため、「的確な判断と連携」と命名した。

さらに、内的整合性を検討するため各下位尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、因子Ⅰでは $\alpha=.88$ 、因子Ⅱでは $\alpha=.77$ 、因子Ⅲでは $\alpha=.73$ 、因子Ⅳでは $\alpha=.56$ という値を示した。このことから、内的整合性があることが確認できた。また、各因子の下位尺度得点の算出を行った。

さらに、質問項目の性格上、各項目の平均点が高得点に偏ることを考慮し、20項目の中でも特に期待されるもの3位までを順に選択してもらった。1位から3位までに選ばれた項目の総数を出し、1位には $\times 3$ 、2位には $\times 2$ 、3位には $\times 1$ とし得点の算出を行った。その結果、総合得点1位は「20. 疾病や事故時に適切な判断・処置をする」で131点、2位「4. 児童の異常を見逃さない観察力がある」で56点、3位「16. 医療・看護の知識がある」と「9. 臨機応変な対応力」で39点であった。

次に、一般教諭が養護教諭に求める資質について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果4因子構造となり、20項目全てが残った。

第Ⅰ因子は「13. 体力」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、養護教諭をしていくあるいは教員をしていく上で基本的に必要な資質と考えられたため、「基本的資質」と命名した。第Ⅱ因子は、「11. 協調性」などの項目に高い負荷が得られた。この因子は、養護教諭として様々な場面で必要になるであろうコミュニケーションを図る上で必要な資質と考えられたため、「コミュニケーション的資質」と命名した。第Ⅲ因子は、「18. 行動力」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、養護教諭として必要な行動をおこしたり判断を行ったりすることと考えられたため、「行動性」と命名した。第Ⅳ因子は、「2. 看護師の資格」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、養護教諭としてもつべき専門知識や一般的な知識と考えられたため、「教養」と命名した。

さらに、内的整合性を検討するため各下位尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、因子Ⅰでは $\alpha=.88$ 、因子Ⅱでは $\alpha=.85$ 、因子Ⅲでは $\alpha=.84$ 、因子Ⅳ

では $\alpha=.78$ とそれぞれに十分な値を示した。このことから、内的整合性があることが確認できた。また、各因子の下位尺度得点の算出をおこなった。

さらに、質問項目の性格上、各項目の平均点が高得点に偏ることを考慮し、20項目の中でも特に期待されるもの3位までを順に選択してもらった。1位から3位までに選ばれた項目の総数を出し、1位には $\times 3$ 、2位には $\times 2$ 、3位には $\times 1$ とし得点の算出を行った。その結果、総合得点1位は「17. 判断力」で68点、2位「6. カウンセリング能力」で60点、3位「16. 優しさ」で44点であった。

次に、実際に養護教諭との連携で困難を感じる時について、主因子法による因子分析を行ったが、因子負荷量が算出されなかったため、重み付けのない最小二乗法による因子分析を行った。その結果2因子、8項目全てが残った。

第Ⅰ因子は「7. 児童に情報を伝達してくれないことがある時」などの項目に高い負荷が見られた。この因子は、日常の中で養護教諭と一般教諭との協力体制や連絡体制が必要な時と考えられたため、養護教諭の分析結果と同様と考えられ、「養護教諭とのコミュニケーションが必要な時」と命名した。第Ⅱ因子は、「3. 健診等の専門知識を理解してもらう時」などの項目に高い負荷が得られた。この因子は、養護教諭が行う専門的な仕事等についての養護教諭との意思の疎通が必要な時と考えられたため、養護教諭の分析結果と同様「専門知識の共有が必要な時」と命名した。

さらに、内的整合性を検討するため各下位尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、因子Ⅰでは $\alpha=.92$ 、因子Ⅱでは $\alpha=.86$ 、という値を示した。このことから、内的整合性があることが確認できた。また、各因子の下位尺度得点の算出をおこなった。

#### 4-3-2. t 検定

因子分析の結果、各質問の因子構造が養護教諭と一般教諭では顕著に異なったため、下位尺度得点を用いての比較は適切ではないと判断し、t検定を用いて養護教諭と一般教諭の比較を実施した。また、養護教諭については、看護師資格の有無と養護教諭歴それぞれについて、一般教諭では、性別と教諭歴それぞれについてのt検定を実施した。t検定の結果から特に一般教諭と養護教諭の比較において有意差のあったものは以下の通りであった。

##### (1) 養護教諭と一般教諭のt検定

養護教諭群と一般教諭群に分け、以下の各質問の全項目においてt検定を実施した。結果は以下の通りである。〔( ) は養護教諭への質問内容〕

①養護教諭に期待している（されている）役割・行動・態度について

回答に不備のあった1名を除き、質問2の養護教諭に期待している（されている）役割・行動・態度について、すべての項目においてt検定を行った。表4はt検定の結果有意な差を示した5項目の一般教諭群と養護教諭群の平均と標準偏差、t値を表したものである。

表4. 養護教諭に期待している役割・行動・態度の両群の平均と標準偏差、t値  
(N=一般教諭群72, 養護教諭群90)

質問項目	群	平均	標準偏差	t 値
2. 健康管理ができる	一般教諭群	4.50	.73	2.47*
	養護教諭群	4.74	.46	
3. 人としての常識的な視点を持つ	一般教諭群	4.47	.67	2.32*
	養護教諭群	4.21	.74	
8. 児童第一に考える姿勢	一般教諭群	4.53	.63	3.58**
	養護教諭群	4.11	.81	
15. 児童を公平に扱う	一般教諭群	4.54	.77	3.12**
	養護教諭群	4.17	.75	
20. 疾病や事故時に適切な判断・処置をする	一般教諭群	4.81	.46	2.01*
	養護教諭群	4.93	.29	

\*...5%水準で有意, \*\*...1%水準で有意

t検定の結果、「2. 健康管理ができる」に5%水準 (t (114.51) =3.07, p<.05)、「3. 人としての常識的な視点を持つ」に5%水準 (t (160) =2.32, p<.05)、「8. 児童第一に考える姿勢」に1%水準 (t (160) =3.58, p<.01)、「15. 児童を公平に扱う」に1%水準 (t (160) =3.12, p<.01)、「20. 疾病や事故時に適切な判断・処置をする」に5%水準 (t (114.07) =2.01, p<.05) で有意な差がみられ、「2. 健康管理ができる」と「20. 疾病や事故時に適切な判断・処置をする」は、一般教諭群よりも養護教諭群において有意に高い値を示した。

②養護教諭に求められる資質について

回答に不備のあった2名を除き、質問4の養護教諭に求められる資質について、すべての項目においてt検定を行った。表5は、t検定の結果有意な差を示した2項目の一般教諭群と養護教諭群の平均と標準偏差、t値を表したものである。

表5. 養護教諭に求められる資質についての両群の平均と標準偏差、t値  
(N=一般教諭群71, 養護教諭群90)

質問項目	群	平均	標準偏差	t 値
2. 看護師の資格	一般教諭群	3.59	1.04	3.70**
	養護教諭群	3.03	.83	
17. 判断力	一般教諭群	4.55	.69	1.99*
	養護教諭群	4.74	.51	

\*...5%水準で有意, \*\*...1%水準で有意

t検定の結果、「2. 看護師の資格」に1%水準 (t (131.87) =3.70, p<.01)、「17. 判断力」に5%水準 (t (124.70) =1.99, p<.05) で有意な差がみられ、「2. 看護師の資格」では一般教諭群、「17. 判断力」

では養護教諭群の平均値が有意に高い値を示した。

③養護教諭に求められる「看護医療的な役割」と「教育的な役割」の比率について

質問6の養護教諭に求められる「看護医療的な役割」と「教育的な役割」の比率について、それぞれt検定を行った。表6は、t検定の結果有意な差を示した一般教諭群と養護教諭群の平均と標準偏差、t値を表したものである。

表6. 「看護医療的な役割」と「教育的な役割」の比率についての両群の平均と標準偏差、t値  
(N=一般教諭群72, 養護教諭群90)

質問項目	群	平均	標準偏差	t 値
看護医療的な役割	一般教諭群	6.11	1.57	3.06**
	養護教諭群	5.40	1.39	
教育的な役割	一般教諭群	3.89	1.57	3.06**
	養護教諭群	4.60	1.39	

\*\*...1%水準で有意

t検定の結果、「看護医療的な役割」に1%水準 (t (160) =3.06, p<.01)、「教育的な役割」に1%水準 (t (160) =3.06, p<.01) で有意な差がみられ、「看護医療的な役割」では一般教諭群の平均値が養護教諭群の値よりも有意に高く、「教育的な役割」では養護教諭群の平均値が一般教諭群よりも有意に高い値を示した。

④養護教諭（一般教諭）との連携で困難を感じる時について

回答に不備のあった4名を除き、質問10の養護教諭（一般教諭）との連携で困難を感じる時について、すべての項目においてt検定を行った。表7は、t検定の結果有意な差を示した7項目の一般教諭群と養護教諭群の平均と標準偏差、t値を表したものである。

表7. 養護教諭（一般教諭）との連携で困難を感じる時についての両群の平均と標準偏差、t値  
(N=一般教諭群71, 養護教諭群88)

質問項目	群	平均	標準偏差	t 値
1. 自分と養護（一般）教諭の意見が合わない時	一般教諭群	2.58	1.19	6.00**
	養護教諭群	3.63	.96	
2. 児童への思い込みが強い時	一般教諭群	2.83	1.07	5.96**
	養護教諭群	3.82	1.01	
4. 養護教諭が行おうとする授業や企画に参加する（してもらう）時	一般教諭群	2.10	1.08	3.01**
	養護教諭群	2.57	.88	
5. 協力的でない時	一般教諭群	3.01	1.45	3.44**
	養護教諭群	3.74	1.14	
6. 依頼を行動に移してくれないことがある時	一般教諭群	2.85	1.44	3.83**
	養護教諭群	3.61	.99	
7. 児童に情報を伝達してくれないことがある時	一般教諭群	2.87	1.42	3.25**
	養護教諭群	3.62	1.01	
8. 情報交換をする時間や場所がとれない時	一般教諭群	3.00	1.33	3.83**
	養護教諭群	3.70	.89	

\*\*...1%水準で有意

t検定の結果、「1. 自分と養護（一般）教諭の意見が合わない時」に1%水準 (t (133.41) =6.00、

p<.01)、「2. 児童への囲い込みが強い時」に1%水準 (t (157) =5.96, p<.01)、「4. 養護教諭が行おうとする授業や企画に参加する(してもらう)時」に1%水準 (t (157) =3.01, p<.01)、「5. 協力的でない時」に1%水準 (t (131.04) =3.44, p<.01)、「6. 一般(養護)教諭からの依頼を行動に移してくれないことがある時」に1%水準 (t (119.34) =3.83, p<.01)、「7. 児童に情報を伝達してくれないことがある時」に1%水準 (t (121.81) =3.25, p<.01)、「8. 情報交換をする時間や場所がとれない時」に1%水準 (t (116.99) =3.83, p<.01)、で有意な差がみられ、養護教諭群の平均値が一般教諭群よりも有意に高い値を示した。

#### 4-4. 考察

養護教諭と一般教諭の t 検定結果より、以下のことが考えられた。

##### (1) 養護教諭に期待している(されている)役割・行動・態度について

「健康管理ができ、疾病や事故時に適切な判断・処置をする」ことについて、養護教諭の平均値が有意に高く、「人としての常識的な視点を持ち、児童第一に考え、児童を公平に扱う」ことについては一般教諭の平均値が有意に高かった。このことから、養護教諭は、健康管理と医療・看護的な役割に重点を置いているのに対し、一般教諭は人としてのあり方や児童への対応の部分でも養護教諭への期待が高く、より広い範囲で養護教諭への期待を持っているのではないかと考えた。

##### (2) 養護教諭に求める(求められている)資質について

「看護師の資格」について、一般教諭の平均値が養護教諭より有意に高く、一般教諭からは看護師資格が求められていることがうかがえた。子どもたちの怪我や病気への的確な対応という点で、看護の技術を看護師の資格が保障してくれる、あるいは看護師の資格があることで、安心感がもてるなどの要因があるのではないだろうか。

また、「判断力」については養護教諭の平均値が有意に高い値を示した。養護教諭自身も、迅速で的確な判断が求められていることを認識していることが明らかとなった。

##### (3) 「看護医療的な役割」と「教育的な役割」の比率について

「看護医療的な役割」では一般教諭の平均値が有意に高く、「教育的な役割」では養護教諭の平均値が有意

に高い値となった。このことから、養護教諭の役割の中で、一般教諭は「医療看護的な役割」に重点をおくのにに対して、養護教諭自身は「教育的な役割」に重点をおいていると考えられた。この養護教諭の、看護医療的な役割と教育的な役割については、一般教諭と養護教諭の認識が異なるところであり、この認識の差が連携や協働に少なからず影響を与えることが考えられるのではないだろうか。

##### (4) 一般教諭(養護教諭)との連携で困難を感じる時について

「健診等の専門的知識を理解してもらう時」以外の全ての項目において、養護教諭の平均値が一般教諭よりも有意に高い値を示した。このことから、養護教諭は一般教諭との連携にやや困難を感じているといえる。これは、一般教諭内の比較の部分にも記したが、同じ職場で働く教育職でありながら、異なる役割をもっていることが困難だと感じる大きな要因といえるのではないだろうか。また、養護教諭が1人ないしは2人しかいないということで、校内での立場が小さくなりがちである部分も、連携に困難を感じることに影響を与えているのではないかと推察した。

## 5. 面接調査

### 5-1. 目的

質問紙調査では深く語られない部分や詳細な現場の実情を把握するため、小学校に勤務しているもしくは勤務したことのある一般教諭と養護教諭に話をうかがった。

### 5-2. 方法

平成20年11月下旬から12月上旬にかけて、一般教諭3名、養護教諭1名に対し広さおよそ10畳程度の個室にて、半構造化面接を実施した。室内では、机を挟み被面接者と対面する位置に筆者が座り、インタビューご協力へのお礼、面接の内容、個人情報保護、インタビューへの参加の自由についての内容の教示を行った。またボイスレコーダー2台での録音の許可を得て、(教員1については録音を実施できなかった)録音と筆記での記録を取りながら面接を進めた。主な質問内容は、「養護教諭の役割」「養護教諭に求められる資質や態度」「養護教諭が行う相談活動やカウンセリングの実際」「看護師の資格の必要性」「連携で困難を感じる時」についてうかがった。おおよそここに示した内容、順番で質問を行っているが、被面接者の状況や回答に応じて面接者が何らかの反応を示したり、質問の表現、順序、内容などを臨機応変に変えることのできる面接法である半構造化面接の特性を活かし、質問の表現、

順序、内容を多少変化させて面接を進めた<sup>13)</sup>。また面接は一人につき40分程度ずつ実施した。

### 5-3. 面接調査の結果と考察

それぞれの先生方から、「養護教諭の役割」「養護教諭に求められる資質や態度」「養護教諭が行う相談活動やカウンセリングの実際」「看護師の資格の必要性」「連携で困難を感じる時」についての意見や考えをうかがうことができた。それらの面接結果を受けて以下のことが明らかとなった。

まず「養護教諭の役割」について、一般教諭からは、的確な判断が最も求められていると考えられた。養護教諭の元へ児童を連れて行くときは、一般教諭では判断に困った時や専門的な処置が必要な時であり、養護教諭には適切・的確な判断をしてほしいという意見がどの一般教諭からも挙がっていた。これに付随して、医療や看護の専門知識があることも養護教諭に望まれていることだと考えられた。また、養護教諭自身も的確な判断をすることを周囲から求められていると認識しており、今回の面接調査も結果からは「適切・的確な判断をすること」について、一般教諭と養護教諭の考えは統一されていると考えられた。また、一般教諭との連携や管理職との連携という部分が重要であるという意見も得られた。これに対して、養護教諭側も、「(08:05) …前の学校は放課後はずーっとクラスを回った。」、「(08:09) …やっぱり自分が保健室にいたら何にも情報が発信できないから、先生を見かけてはつかまえて、『今日誰々がこんな事言っていましたよ』とか…」、「(35:09) …『どうでした』って聞くみたい。そうすれば誤解もないし…」というように、積極的に一般教諭、特に担任とのコミュニケーションを充実させようとしており、両者にとって必要な養護教諭の役割だと認識されていることがうかがえた。

次に、「養護教諭に求められる資質や態度」について一般教諭からは、役割同様の確な判断を行う判断力や専門知識が挙げられた。また、児童の様子や変化に「気づける」こと、「報告・連絡・相談」を含めてコミュニケーションがとれることが、養護教諭に共通して求めていることだと考えられた。これに対して養護教諭も、的確な判断をすることと臨機応変な対応力をもつこと、さらにコミュニケーション能力が必要だという認識を持っており、養護教諭に求められる資質や態度についても両者の間に相違はなく、共通の考えであることがうかがえた。

次に「養護教諭が行う相談活動やカウンセリングの実際」について一般教諭からは、カウンセリングの理論を知ることは大切であり、その理論を持って、児童や教職員の相談活動の際の話を聴き方や声のかけ方な

どに活かしていくべきであり、関心がないよりはあった方がいいという見解で共通していた。しかし、トラブルの多いところであったり、相談活動に養護教諭が加わると話がややこしくなる、などの意見も挙がった。養護教諭からは「(10:01) (カウンセリングの理論について) 知らないといけないなとは思う…」、「(10:42) それがないと養護教諭の役割を果たせないような…」というところから、カウンセリングについて理論の修得や必要性は認識していることがうかがえる。このような、養護教諭が行う相談活動やカウンセリングについては、必要性という部分では一般教諭と養護教諭の認識は一致しているが、それをどのように活用していくかという部分については、一般教諭と養護教諭との認識の差が生じる部分であるのではないかと考えられた。

次に「養護教諭を交えた保護者への支援のありかた」について、一般教諭からは、担任の先生との連携を十分にとり共通理解をもち行うべきであるという意見と、養護教諭が関わると話がややこしくなり逆にゴタゴタとしてしまうので、関わるのならばどの位置で関わるのか、立ち位置を弁えるべきであるという意見が得られた。また、児童の怪我などについての処置の状況を保護者へ伝えるときに、その詳細を養護教諭から説明してもらうことは、専門的な知識をもつ人の見解ということで養護教諭へ繋ぐことが多いことがうかがえた。これに対して養護教諭は、「(13:17) …保護者にじゃあ来てもらいましょうってなって、一時期、お父さん、お母さん、男の子4人で保健室にいたことがある…」ということや、肥満児への指導という部分で保護者と関わることはあっても、保健室登校児への対応などで担任と一緒に保護者に関わる経験がないということで、詳細な回答は得られなかった。しかし、「(10:51) 怪我とか病気とかは必ず話はするようにしてる。むしろ先生たちが良く分からないから『お願い』って言われる。」という部分からも、処置などの専門的判断の伝達の部分では一般教諭同様関わりを持つと考えられた。「養護教諭を交えた保護者への支援のありかた」については、学校の環境や管理職の考え方等に影響を受けやすいと考えられるため、その環境によって関わり方にも様々な変化が見られるのではないかと推察した。

次に「看護師の資格の必要性」について、一般教諭からはあった方がよいという意見と、無くても適切な判断や処置が出来ればよいという意見が得られた。どちらにしても、適切・的確な判断と処置について養護教諭に求めていることがうかがえた。また、養護教諭も「(40:33) あった方がいいな…そしたら、先生たちにも納得してもらえらるだろうし…」ということから看

護師資格がある方が、判断や処置に対して一般教諭から安心感を持ってもらえると考えていることが推測できた。

最後に「連携で困難を感じる時」について、一般教諭からは特にないが、保健室の居心地が良すぎるといかせたくないという意見も得られた。これに対して養護教諭からは、「(15:47) あります。例えば、怪我の面ではこれは自分は病院に行ったほうが良いと思うけど、先生としては怪我の数とか病気の数とか気にしたりして…」と、養護教諭の判断を実行してくれない時に連携での困難を感じる事があるという回答が得られた。これについても、学校の環境や考え方が大きく影響してくるところではないかと考えられた。

## 6. 総合考察

以上、学校の中で養護教諭に求められる役割について、一般教諭から求められる養護教諭のあり方を軸にみてきた。一般教諭、養護教諭双方の視点から、養護教諭のイメージや保健室運営の実際を踏まえ、養護教諭の在り方について考えていく中で、一般教諭からみた養護教諭の姿と、養護教諭自身が考える養護教諭の姿が明らかになってきたのではないかと考える。

今回の研究において、一般教諭からみた養護教諭のあり方（イメージや役割、資質、保健室運営）と養護教諭自身が考える養護教諭のあり方には差異があり、その認識の違いが、連携や協働のしにくさに繋がっているのではないかと、という仮説を筆者はもっていた。そして、認識の差や考え方の相違を見つめ直すことで、一般教諭と養護教諭の関係構築のあり方を模索したいと考えていたが、養護教諭に求められている役割・行動・態度、資質については、「疾病や事故時に適切な判断・処置をすること」、特に「判断力」については、一般教諭も養護教諭自身も養護教諭に必要な資質だと認識していることが、質問紙調査と面接調査から明らかとなった。

特に差がみられた部分は、養護教諭に求められている役割の比率についてであった。「看護医療的な役割」がより一般教諭からは必要だと考えられているのに対し、養護教諭は「教育的な役割」に重点をおいていることが今回の研究から明らかになった。そして、一般教諭が養護教諭に「看護師の資格」を求めているという結果からも、その考えの差がうかがえた。また、女性の一般教諭が養護教諭へ求める役割や資質、保健室運営上の注意点などについて、男性の一般教諭より多くの項目で有意に高い平均値を示したことから、女性教諭からの養護教諭への要望が高いこともうかがえた。

また、一般教諭と養護教諭双方に連携で困難を感じることがあるかどうかを尋ねた問いでは、多くの項目

において、養護教諭の平均値が有意に高く、現場で養護教諭が一般教諭との連携に困難を感じていることを示唆する結果となった。つまり、他の認識に大きな差異がなくても連携や協働には困難を感じているということは、困難を感じる原因が「看護医療的な役割」と「教育的な役割」に対する双方の認識の差にあると考えられるのではないだろうか。この部分に焦点をあて、明らかにすることは今後の課題と言えるだろう。また、養護教諭自身は、上記のように一般教諭との連携や協働に困難を感じているが、一般教諭は養護教諭へ高い評価を示していることも明らかとなった。これは、養護教諭に求められる役割・行動・態度への達成度を尋ねた問いに顕著に現れており、すべての項目において、一般教諭の値が有意に高く、養護教諭自身が考えている以上に、一般教諭からは養護教諭の働きが評価されていると考えることができた。

今回の研究で、一般教諭と養護教諭自身の養護教諭に対する認識には、「看護医療的な役割」と「教育的な役割」に対する差がみられた。また、一般教諭からは養護教諭はよく自分の役割を達成していると考えられているにもかかわらず、養護教諭は一般教諭との連携や協働に多少なりとも困難を感じている、という現場の状況が明らかになったことに、一つの意義があるのではないかと考える。この事実をもとに、さらに研究を進展させていく必要があるだろう。

さらに、もう一つの今後の課題として、現場の養護教諭の現状を踏まえた上で、これから養護教諭になろうとする学生へのフィードバックを行うことにも大きな意味があると考えている。現場に出て一般教諭との連携や協働にとまどうことがないように、そして養護教諭という職にさらに魅力を感じられるように、研究の結果を養護教諭を目指す学生へ還元していきたいと考えている。

本研究実施にあたり、ご協力いただきました多くの一般教諭の先生方、養護教諭の先生方に深謝申し上げます。

また、調査に多大なご尽力をいただきました、福田幸男先生、佐島群巳先生、宍戸洲美先生、田中浩之先生、濱信子先生に深甚なる謝意を申し上げます。

尚 本論文は、日本教師教育学会第19回大会において報告したものに、加筆、修正したものである。

(注)

1) 宍戸洲美『養護教諭の役割と教育実践』 学事出

版2000

- 2) 杉浦守邦『養護教員の歴史』 東山書房 1974
- 3) 鈴木裕子『養護教諭のアイデンティティに関する研究－養護概念の変遷を中心に－』  
<http://www.matsuishi-lab.net/ynu/yogo.htm>  
2005
- 4) 大谷尚子「養護教諭のアイデンティティ－学生の抱く養護教諭観から見えてくること」『こころの科学』No.98、pp.89-94 2001
- 5) 4) 前掲書
- 6) 穴戸洲美「養護教諭・私たちの仕事」(帝京短期大学 第1回卒業後教育) 2008
- 7) 入澤充「学校事故防止と養護教諭の法的責任－危機管理の進め方」(平成20年度神奈川学校保健連合会養護教諭部会 研修会) 2008
- 8) 早坂幸子「養護教諭の職務認識による行動の類型化」『日本養護教諭教育学会誌』Vol.4、No.1、pp.69-77 2001
- 9) 伊藤美奈子「相談活動を期待される養護教諭の役割認知とその悩みに関する一研究」『カウンセリング研究』Vol.30、No.3、pp.266-273 1997
- 10) 松本敬子・吉田道雄「養護教諭に求められる役割・行動・態度および資質に関する実証的研究－養護教諭・一般教諭の認識調査に基づいて－」『熊本大学教育学部紀要』Vol.38、pp.209-218 1989
- 11) 小倉学「養護教諭の満足・不満要因について－16年前の調査結果との比較を中心に」『学校保健研究』Vol.31、No.5 1989
- 12) 杉村直美「養護教諭という職－学校内におけるその位置と専門性の検討－」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』Vol.51、No.1、pp.75-86 2004
- 13) 保坂 亨、中澤 潤 大野木裕明『心理学マニュアル 面接法』北大路書房 2000